

# Ludwig Derleth の『宣言』と『フランケン のコーラン』

大 野 篤 一 郎

トーマス・マンの長篇小説『ファウスト博士』の第34章で、語り手ツァイトブローームは、図案家・装幀美術家であるジクストゥス・クリトヴィスのミュンヘンの住居で行われた集りに、時々出席する詩人のダニエル・ツァーア・ヘーエ Daniel Zur Höhe について、次のように述べている。

「彼は僧侶のような真黒い服装をした三十男で、猛禽のような横顔を見せ、話しかたはハンマーで打つようだった。たとえば《そうともそうとも、そう悪かあない、ああむろんだとも、そうとも言える》といったぐあいであるが、そういうとき彼は絶えず神経質に、しきりに足の拇指の腹で床を打っていた。彼は両腕を胸の上で組んだり、片手をナポレオンふうにあふところへ入れるのが好きだった。そして彼の詩人の夢は、流血の戦争で純粋精神に屈服し、それによって恐怖と高い紀律を保たれた世界にむけられていた。これは彼のたしか唯一の作品である戦前すでに手漉き紙で出版されていた《宣言》、著しい言葉の力を認めずにはいられない陶酔的なテロリズムの抒情的、修辭的な爆発であるこの作品に彼が書いていたような世界なのである。この宣言の署名者はクリストゥス・インペラートル・マクシムスという名になっており、命令する熱狂者であって、これは、決死の軍隊に地球を制服させようとし、日令めいたメッセージを出し、放埒で峻厳な条件をとりきめ、貧困と純潔とを唱え、文句なく限りなく従順であれとハンマーを叩き、拳骨で打って要求することをいくらしても足りないほどのものだった。《兵士たちよ！》と詩は結んでいた。《われなんじらの掠奪するにまかす——世界を！》」<sup>1)</sup>

トーマス・マンがここで「冗談めいた無責任な唯美主義者」の代表として登場させているダニエル・ツァーア・ヘーエのモデルとなったのは、1904年に散文詩『宣言』*Proklamationen* を発表した、当時、ゲオルゲ派に属していた詩人ル

ードヴィヒ・デルレット **Ludwig Derleth** に他ならない。トーマス・マンの彼に対する「前ファシズム的な無責任な唯美主義」という批判が、デルレットその人に当てはまるかどうかを論ずる前に、ドミニク・ヨースト **Dominik Jost** の書いたモノグラフィーに拠って、彼の生涯について簡単に述べて見よう。

## I

詩人ルードヴィヒ・デルレットは1870年11月3日、下フランケン地方のゲロルツホーフエン **Gerolzhofen** に、司法試補 **Rechtspraktikant** ヨハン・デルレット **Johann Derleth** の第一子として生れた。デルレットの先祖はフランケン人で、その何人かは羊飼いであり、また将校であった。1872年4月、父ヨハンはシュタット・プロツェルテン **Stadtprozelten** の地方裁判所の書記に任命され、ここで1874年、詩人の妹アンナ・マリア・レギーナ **Anna Maria Regina** が生まれた。1879年に、父は判事としてビショッフスハイム・フォア・デア・レーン **Bischofsheim vor der Röhn** に移った。1881年、ルードウィヒ・デルレットはザーレ河畔のノイシュタット **Neustadt** の **Lateinschule** に入り、翌年にはミュンナーシュタット **Münnerstadt** の **St-Josef-Studienseminar** に入り、更に1883年10月からはニュルンベルク **Nürnberg** の **Egidien-Gymnasium** で勉強を続けた。1889年8月8日付の卒業証書には「彼は非常に勤勉な、全く品行方正な生徒であったが、その成績は二、三年前から重い神経疾患によって害われた。既に快方に向いつつあるが、完全に治癒せんことを望む」と書かれている。この経験が、後に彼が大学の精神科で医学を学ぶ原因になったと思われる。

1889年秋、デルレットはギムナジウムの教師になるため、ミュンヘン大学の文学部に入学した。彼は哲学、古典文献学、ドイツ文学、歴史、東洋学、物理学等の講義を聞き、1892年には大学を出た。

1893年12月から彼はザーレ河畔のハンメルブルク **Hammelburg** で教育試補として、1894年2月からは曾て学んだミュンナーシュタットの **St-Josef-Studienseminar** にギムナジウム助手 **Gymnasialassistent** として勤めた。当時の彼の生徒の一人オットー・レープ **Otto Reeb** は彼の思い出の中で、デ

ルレットが古典語の翻訳に際して示した驚くべき才能を描いている。

「彼は大体似たようなドイツ語の表現を見出すのでは満足せず、むしろ非常なエネルギーを使って、絶対にぴったりのドイツ語、全く一致するドイツ語のいい廻しを見つけさせようとした。……全く忘れることのできない時間は、デルレットが国語の授業で詩を取り上げ、それを自分で朗読し、解釈し、詩の美しさを彼の精神の光に当てて光り輝かせた時であった。<sup>3)</sup>」

1893年、デルレットは、パリからミュンヘンに絵の勉強に来ていたポーランドの貴族の娘ヤドヴィガ、ド・ヤンコフスカ *Jadwiga de Jankowska* と知り合った。彼女がパリへ帰った後も文通は続き、翌94年夏、デルレットは彼女に求婚するためパリへ赴き、彼女の両親にも会った。しかし、彼女との間に違和感があり、両親も二人の結婚には反対であった。同年のクリスマスに彼がヤドヴィガに与えた小さな十字架にはラテン語で *vale anima pia* (さらば敬虔なる魂よ) と書かれていた。それはカタコーム時代のキリスト教徒が死者に別れを告げる時の言葉であった。

1894年秋、デルレットは妹のアンナ・マリアに詩ができたことを伝え、それを *Symphonie* と呼んでいる。1896年、彼は季刊誌『牧羊神』 *Pan* の編集長であるハリー・ケスラー *Harry Kessler* と知り合い、その年の『牧羊神』の第三分冊に *Anadyomene* (ヴィーナス) と *Verwesung und Flamme* (腐敗と焰) を掲載した。

1897年7月、デルレットはローマに旅し、ポーランドの死復活信仰派 *Resurrektionist* の修道院に修練士として入ることを許された。二ヶ月の期限つきであったこの修道院での滞在は、神学を学び、より多くの志を同じくするものを見出す可能性を与える筈であった。この頃、修道院から妹に宛てた手紙の中で、彼は次のようにいっている。「今や私の中に大きな力があるということを、私は大胆に主張できる。私は今ナポレオンの生涯を読んでいる。私が彼より劣っているとは思わない。三年あれば、私が過去に怠ったことを取り返すのに十分だ。……私は何が何でも独りでいなければならない。時がたてば、誰も私を曾ての私だとは認めないだろう。<sup>4)</sup>」彼が修道院の中で何をしようとしていたのか、具体的には明らかでない。彼は恐らく新しい教団を建てるプランを

考えていたと推測される。ともかく、二ヶ月後、彼は修道院を出た。

1897年11月、デルレットはパリに到着、サン・ルイ島のローザン宮 **Palais Lauzan** の一室に住む。12月26日付の妹宛の手紙では、「私にとっては文学が真剣な問題である」<sup>5)</sup> といっている。翌年3月には、後に有名になった彫刻家ゲオルク・コルベ **Georg Kolbe** と知り合った。コルベは当時のデルレットについて次のように語っている。「彼は人間を、誠実な人間を探し求めている。彼の目標は、この選ばれた人々を一つのグループにまとめることであった。それは次第に大きくなって、同じ考えに鼓舞され、同じ高い努力に貫かれて、すべての人間に精神的影を及ぼす筈であった。彼は私達に、彼の考えを実現するのを一緒に手伝うことのできるような人物を私達の間で探してくれと頼んだ。……彼の夢は、教会を改革し、純化し、彼自身がそこで一つの高い地位を占めるような新しい神裁政治を打ち立てることであった。彼が傲慢で野心があったと主張することはできない。決してそうではない。しかし、彼には心をひきつけ、服従させ、感激と感嘆という強いきずなで縛りつける支配者の素質、才能があった。<sup>5a)</sup>」

デルレットはこうして見出した友人達に困難な仕事を課した。アルタヴァル **Artaval** という友人は、彼の命令に従ってイェルサレムへ行き、その或る修道院で二年間過ごさねばならなかった。ヴィートマン **Widmann** も、パリでのデルレットとの約束に従って、殆んど無一文でテサロニカへ行かねばならなかった。

コルベは先に引いた回想の中で次のようにいっている。「私に抵抗を感じさせ、気づかれないほどゆっくり彼から引き離したのは、彼の絶対的服従の要求であった。私はもう私自身ではなかった。私は私自身の個性が圧迫されているのを感じた。私はそれに結局我慢ができなかった。私は逃げた。<sup>6)</sup>」1899年5月13日附の妹宛の手紙で、デルレットは、「ヴィートマン、コルベ、アルタヴァルなどの古い名前を私はもう当にしてはならない。私は新しい人間を見出し、別の部隊を作り出さねばならない。それが、曾ての同志ともう一度結びつく唯一の可能性であろう。<sup>7)</sup>」と書いている。

1899年彼は再びパッサウ **Passau**、フュルト **Fürth**、ゲルメルスハイム

Germersheim で教職についた。1901年、彼はゲオルゲの友人カール・ヴォルフスゲール Karl Wolfskehl の紹介でゲオルゲと知り合い、『芸術手帳』 *Blätter für die Kunst* の協力者となった。

1904年の復活祭の前週、彼の処女作ともいうべき散文詩『宣言』 *Proklamationen* がミュンヘンのデトゥーシュ街のデルレットの家で朗読された。朗読会は三度催されたが、トーマス・マンが短篇『予言者の許で』 *Beim Propheten* で描写したのは、モノグラフィーの著者 D・ヨーストによれば、第二回目の朗読会である。『宣言』は同年12月にライプツィヒのインゼル書店から 500 部出版された。

1906年、デルレットは教職から最終的に退き、居をミュンヘンの中心のマリーエン広場に移した。1906年秋、再度、ミュンヘン大学に入学、フルトヴェングラーのギリシヤ美術の講義を聞き、更に1907年から1910年まで精神科のエミール・クレペリン Emil Kraepelin の実地指導に参加した。

1909年と1910年の『芸術手帳』に二十七の詩を掲載した。デルレットとゲオルゲの関係について言及すると、ヨーストによれば、ゲオルゲは彼を自分と同等の者と見做していた。1908年にゲオルゲがデルレットに宛てた手紙の中で、彼は「貴方の詩には、讃辞としていいうる最高のもの、即ち生命の息吹き <sup>8)</sup> *Lebensodem* がある」といっている。他方、デルレットはゲオルゲが、その作品と同時代人に対する働きかけによって果した使命を意識していた。ゲオルゲは『第七の環』 *Der siebente Ring* の中で、デルレットとその妹アンナ・マリアに詩を献じ、デルレットはそれに応じて『芸術手帳』の第八巻で『双子』 *Die Dioskuren* と『隣人』 *Der Nächste* をゲオルゲに献じた。

### An Derleth

Du fälltest um dich her mit tapfrem hiebe  
Und stehst nun unerbittlicher verlanger.  
Wann aber führt dich heim vom totenanger  
Die täglich wirksame gewalt der liebe?..

In unsrer runde macht uns dies zum paare:

Wir los von jedem band von gut und haus :  
Wir einzig können stets beim ersten saus  
Wa grad wir stehn nachfolgen der fanfare.<sup>9)</sup>

### An Anna Maria

Behängt mit allem doch des EINEN bloß  
Wozu man bald euch ruft, was euch nur tüchtigt  
Ihr schwestern : eurer lampen öl verflüchtigt.  
Betörte ! wir sind nur durchs opfer groß. <

Du richtest unser eitles tun und ringen  
Mit hartem blick.. doch manchmal böse nonne.  
Wird durch dein lächeln jedes düster sonne  
Und hof und stadt ein markt von wunderdingen.<sup>9a)</sup>

### Die Dioskuren

Die toten laß um ihre toten trauern  
Die einmal löschend aus dem lebensbuch  
Des schicksals erzenen schluß nicht überdauern.  
Doch du vernimm geheimer lehre spruch :  
Von göttersöhnen sagt man die vor zeiten  
Im leben ungetrennt des Hades macht  
Nicht ewig mag vom glanz der welt zu scheiden  
Sie wandeln nur abwechselnd in die nacht.  
Und weilt der eine leblos bei den schatten  
Steht Einer noch am höchsten firmament  
Dess leuchte in der brust des bruders brennt  
Daß sich mit dunst die hellen lichter gatten.  
Um ihn ist tag in seiner engen gruft.  
Purpurnes blut fühlt er durch adern fließen  
Bis wieder ihn aus unterwelt-verliesen  
Der stunden reihe an die sterne ruft.<sup>10)</sup>

## Der Nächste

Ich fand dich fremd den nächsten. fast dir selbst.  
Wie schien der garten rings um dich versteint  
Da stern im blick und sehnsucht in der glut  
Du auf die öde eisgen lebens starrtest  
Auf jede stunde der verheißung harrtest  
Uud ich mich kor als deiner not genossen  
In trübsal treu zur fahrt die angeschlossen  
Mit jenem ring der unaufklettbar eint.<sup>10a)</sup>

1910年頃から、ゲオルゲとデルレットの歩む道は分かれてしまった。後にデルレットはゲオルゲについて「私には純粹で美しい彼の思い出しかない<sup>11)</sup>」と繰り返しているが、彼がゲオルゲ派の多くの人物、アルフレート・シュラー Alfred Schuler やルードウィヒ・クラークス Ludwig Klages などを断乎として拒否したことを隠さなかった。ゲオルゲも1910年以後、自分の弟子がデルレットに会うことを望まなかった。

1912年、ダルムシュタット Darmstadt からミュンヘンに音楽の勉強に来ていたクリスチーネ・ウルリヒ Christine Ulrich と知り合い、口述筆記などの仕事をして貰うようになった。

1918年の終り頃、デルレットは先に出版した『宣言』に手を加え、翌年新版をミュンヘンのムザリオン書店から出版した。そしてこの新版が出るとすぐ、彼は新しい詩作にとりかかったが、これは後に『教団の書』*Das Buch vom Orden* として、より大部の著作『フランケンのコーラン』*Der Fränkische Koran* の一部をなす筈であった。ヨーストによると、この『フランケンのコーラン』の中に、デルレットは彼の故郷のフランケンとイスラム的東方世界とを結びつけた。コーランが律法であると同時に詩であるように、『フランケンのコーラン』もそれらすべてを自分の内に含むと同時に、更に西洋と東洋とを含む筈であった。その意味において、デルレットの『フランケンのコーラン』はゲーテの『西東詩篇』*West-östlicher Divan* を意識的に継承し、拡大しようとしたものであるといつてよい。事実、この二つの詩集の間には、用語のみ

ならず、イメージの似た点が多く見出される。しかし、ゲーテがハーフィスの詩の中にあるような健康な生の此岸性を歌おうとしたのに対して、デルレットはむしろそのような生の此岸性を乗り越えようとしている点に、この二つの詩集の大きな相違がある。

『フランケンのコーラン』は年と共にますます大部のものとなっていったので、1923年夏にはヘッセン州のハイリゲンベルク **Heiligenberg** で、原稿全体がクリスチーネ・ウルリヒの手でタイプで書き写された。これがハイリゲンベルク草稿 **Heiligenberg-Fassung** である。

1923年、デルレットは四度ローマを訪れ、スペイン広場の上に居を構えた。そして1924年3月には1912年以来、妹アンナ・マリアと共によき協力者であったクリスチーネ・ウルリヒとローマのドイツ大使館で結婚式を挙げた。

ローマでの彼の生活は今まで以上に内省的なものになっていった。この時代にデルレットの蔵書は膨大なものになった。ドイツ文学の主要な作品の全て、イギリス・イタリア・フランス文学の作品、そして歴史、特に文化史が読まれ、彼が尊敬して止まないナポレオンに関する文献が集められた。地理学、東洋学の本も集められ、ギリシヤ・ローマ時代の古典文学の作品も殆んどあった。他方、考古学・哲学・心理学・神学・宗教学・錬金術・博物学・古銭学・美術史に関する書物も夥しくあった。

1927年夏、三年にわたるローマ滞在は終り、冬をスイスのバーゼルで過した後、デルレットはウィーンの郊外のペルヒトルツドルフ **Perchtoldsdorf** にマリア・テレジアの建てた狩猟用別荘を買入れた。ここでデルレットは『フランケンのコーラン』の中の最も浩瀚な散文の作品『聖者』*Der Heilige* に着手した。『フランケンのコーラン』の原稿は、こうして更に膨大なものとなって来たので、彼は韻文だけをまとめて作品の第一部として1932年に出版した。

1933年3月、デルレットは考古学の団体に加ってオリエント旅行をした。

政治的な出来事がオーストリアの空気を陰悪なものとし始めた。1934年2月のナチの騒擾事件、7月25日のドルフス首相の暗殺。1935年夏、デルレット夫妻はペルヒトルツドルフの家に別れを告げ、スイスのテッシン州の寒村サン・ピエトロ・ディ・スタビオに移った。彼はますます人間を避けるようになって



た。或る手紙の中で、デルレットは次のようにいっている。「私は一切の外の動きから離れて生きています。今日こんなに大騒ぎをして出来上りつつあるものの未来を私は信じません。私の共感に純粹に過ぎ去ったものに向けられています。曾て大いなる瞬間に生じたものは、有難いことに、もはや壊されることはありえないのです。」<sup>12)</sup>

1937年春、『フランケンのコーラン』の中の『聖者』の一部がまとめられ、修道僧インメルヴェッハ Immerwach の物語が『天使の結婚』*Seraphinische Hochzeit* という題で1939年に出版された。

1939年の末頃からデルレットの健康は悪化し始め、彼の非常に高い血圧は動脈硬化症の始まりを示していた。ひどいデプレッションと明るい生命感とが交互に現われた。彼の手は既に長いこと書くことができなくなっていた。本を手を取ることもできなかったので、妻のクリスチーネが朗読した。このような健康状態の中でもなお、彼は第二の『宣言』ともいえる『タナトスの死』*Der Tod des Thanatos* を書き続け、1946年に出版した。

天気の良い日にはなお、運動中枢の障害にも拘らず、妻の手を借りて庭の中を歩くことができた。1947年にはオーストリアに残っていた妹アンナ・マリアが妻クリスチーネの計らいでスイスに来ることができ、兄妹は10年振りの再会を喜び合った。1948年1月初め、デルレットの死が目前に迫ったことが明らかになった。1月11日、彼は終油を受け、13日早朝息をひきとった。16日、彼の棺は村人に担れて、スタビオの墓地に埋葬された。

以上、ルードウィヒ・デルレットの生涯を簡単に述べた。次にわれわれは彼の処女作ともいうべき『宣言』の中心思想を明らかにしよう。

## II

『宣言』*Proklamationen* はキリストの名において俗世に対しなされた宣戦布告で始まる。ここで「われわれ」といわれているのは「キリストのまねび」*Imitatio Christi, Nachfolge Christi* をモットーとする 戦闘的キリスト教徒である。

「われわれは鷲のように、昇る太陽からやって来た。勇気と服従という高

い模範を粗野な集団にもたらすために。われわれが誰であるかを知りたいならば神殿騎士と東洋に聞け。彼等がお前達に答えるであろう。それは太陽に照らされた、気高い族であり、焰の性をもって上へ上へと努め励む。われわれは皆、われわれに対して同盟し、ナザレのイエスの名において戦いを告知する。<sup>13)</sup>」

最初の言葉が示しているように、このキリストの戦士の徳は勇氣と服従であり、彼等の模範は曾て十字軍としてイエルサレムを守った神殿騎士団とアラビアのアサシン派である。<sup>14)</sup>そして彼等の戦いは俗世にキリストを再び告知することである。

デルレットは熱烈なカトリックであったが、彼はカトリック並びにプロテスタントの教会に対しては批判的である。彼は現にあるカトリック教会が地上における神の国を具現しているとは考えていない。彼は、例えば、後に『タナストの死』の中でも「最も確かなことは、今日人類の理性や生活の中にあるのはキリスト教の偽像 **Scheinbild** であるということである。キリスト教はまだその使命を果たしてはいない。」<sup>15)</sup>従って、キリスト教の真の精神を復活させることが彼の課題である。そしてそれは「キリストのまねび」にあると彼は考える。彼にとっては、キリスト教は単に教義ではなく、行為であり、実践である。キリスト教徒にとって大切なのは、イエスの教えを理論的に理解することではなくて、イエスの言葉に従って生きることである。デルレットは「信仰より重要なのは真のまねびである」<sup>16)</sup>とさえいっている。『宣言』においては、まねびは、先ずキリストの命令への絶対服従である。そして「キリストの **Testament** は戦争である」<sup>17)</sup>が故に、キリストに服従するものは、「イエスの名において戦いを告知する」<sup>17a)</sup>のである。この本の中で、一見軍国主義的狂信のように見えるのは、実際は、このように「キリストのまねび」の具体化としての神の国の到来のための戦いなのである。そこにあるのは全く宗教的な熱狂であって、それは何ら政治的な意図を持つものではなかった。実際、『宣言』の或る箇所では、彼は「キリスト教的生活は、合理的教義が優勢になり、国家に敵対的な実践が衰えるに応じて、それだけその理想から遠ざかった」<sup>18)</sup>と述べているように、彼の考えているキリスト教は国家に敵対的である。何故なら、国家には

神となったシーザーの人格という形で反キリスト的な反対像があるからである。このように彼の宗教的熱狂は国家主義的熱狂とは結びつかない。

さて、「キリストのまねび」は全的なものでなければならぬから、キリストに従うものにとっては、自己の人格を顧慮せず、自己を完全に投入することが重要となる。それは「たれでも私について来たいと思うものは、自分を捨てよ<sup>19)</sup>」というキリストの命令の実行である。

このように、「キリストのまねび」において一致団結し、自己を俗世に対する戦いに投入する者にとっては、死はもはや個人的なものではあり得ない。デルレットは「どんなキリスト教徒もはや個別的に死ぬ権利はない。彼はその隣人と共に仆れるのである<sup>20)</sup>」と言う。隣人は、デルレットにとっては、「われわれと共に極度の危険を冒すことを決心した者<sup>21)</sup>」である。

キリストを最高司令官 **Imperator Maximus** とするキリストの戦士達の軍隊というイデーは近代の個人主義的民主主義的社会的イデーに対立する。デルレットは「近代世界の民主主義的秩序に対して、われわれは恐れられた服従の模範を提出する<sup>22)</sup>」という。このキリストの軍隊に近い例を挙げるなら、ローマの歩兵、ペルシヤのアサシン派の暗殺団、そしてイエズス会である。

以上、われわれは『宣言』の中のデルレットの中心思想をほぼ明らかにすることができたと思う。次に、『フランケンのコーラン』（第一部）の叙述に移る前に、冒頭に述べたトーマス・マンのダニエル・ツーア・ヘーエを通してのデルレットに対する批判について考えて見よう。

### III

マンは、『フェウスト博士』の中で、ダニエル・ツーア・ヘーエに代表されるワイマール共和国時代のドイツのインテリの精神状況を描き出すと共に、彼等を痛烈に批判している。（デルレットの『宣言』の初版は第一次大戦の十年前に発表されたのに、マンはそれを第一次大戦後のこととしていることは注意されねばならない。）

マンによれば、第一次大戦後のドイツ人は大きな価値喪失を味わい、個人の運命に対する無関心が支配的であった。そのような精神的雰囲気は、しかし、

マンによれば、既に第一次大戦以前からあったものであり、戦争は唯それを露わにしたに過ぎない。そのようなニヒリスチックな生活感情は市民的伝統、即ち教養、啓蒙、ヒューマニティなどの諸価値に対する批判と結びついていた。しかも、これらの市民的伝統に批判を加えたのは教養や教育や学問にたずさわる人間であった。彼等は自由な制度というものを信じない。「フランス革命によって伝統的な国家と社会の形態が破壊されると共に、意識するにせよ、しないにせよ、是認するにせよ、しないにせよ、平均化され、アトム化され、接触を失い個人と同様、途方にくれた大衆に対する専制的な強制支配へ進む時代が始まったのである」<sup>23)</sup>と彼等は考える。そして、彼等はこの時代の趨勢に対して道徳的に反対し、そのような非理性的暴力的な時代の到来を防ごうとはせず、その到来を認識することに満足を見出し、それに反抗したりするのは自分の仕事ではないと考えている。トーマス・マンの分身であり、彼の市民性を表わしていると思われる語り手ツァイトブROOMは、ここで唯美主義と野蛮との親近性、野蛮の開拓者としての唯美主義の危険性を指摘する。それはまた、マン自身の中にある **Künstlertum** を一面的に表わしている主人公レーヴナーキューンの芸術の非人間的な危険性の指摘でもある。

確かに、最高司令官であるキリストの命令に従って一切を犠牲にし、俗世に対する戦いに仆れることを厭わない戦闘的なキリスト教徒の教団という、デルレットのイデーは或る意味で反動的であるかもしれない。しかし、そこに唯美主義を指摘することができるであろうか、そこにはむしろ一種の極端な道德主義さえ現われているのではないであろうか。彼の一眼アナクロニズムと思われる中世的な宗教的集団主義の理想は、個人主義的なブルジョア社会に対する批判であった。彼のモノグラフィーを書いた D・ヨーストによると、デルレットは「私はブルジョアもボヘミアンもどちらも嫌いだ。しかし、どちらか一方を選べというのならボヘミアンを選ぶ」<sup>24)</sup>といったそうであるが、彼がブルジョアと共に唯美主義者であるボヘミアンも嫌いだといっている点に、われわれはむしろ注目したい。デルレットは後に『フランケンのコーラン』の一部をなす筈であった『教団の書』の中で「一切の救済は結局、根源的共同体を再建することである」<sup>25)</sup>といっている。個人主義的市民社会においては人間は人間から疎外さ

れ、人間自身が人間の敵となっている。デルレットは「人類ほどばらばらな存在はない。それは生きた中心がないから統一を欠いており、それは世界過程を導く人格的法則、理性をもった頭を必要としている」<sup>26)</sup>という。デルレットの理想とするカトリック的共同体は、国家とは違って、構成員によって生み出された自由の作品である。単に世俗的な国家には、自由意志と愛と真理と正義の王国を生み出すことはできないと、彼は断言する。

D・ヨーストによれば、曾てデルレットの教え子であったオットー・レープ Otto Reeb は、1950年2月にトーマス・マンに手紙を送り、デルレットにはマンが『ファウスト博士』の中でいったような、「冗談めいた無責任な唯美主義」というような批評は当てはまらないと抗議した。マンは同年4月1日附の彼に宛てた返事の中で、次のようにいっている。「このファウストゥスは非常に道徳的な本で、そこでは特に唯美主義と野蛮の無気味な親近性が問題になっています。そこで、知らず知らず、デルレットを思い出させるような容貌をした詩人ダニエル・ツーア・ヘーエのような人物が、小説の前ファシズム的な人物達の中に入り込んで来ることになったのです。確かにツーア・ヘーエはデルレットそっくりではありません。私はルードヴィヒ・デルレットが、この彼の人柄を殆んど尽していない半肖像画を見るに至らなかったことを喜んでいます。多分、彼はそれが自分だとは全然分らなかったでしょう。」<sup>27)</sup>

トーマス・マンがデルレットをモデルとしたのは、しかし、これが始めてではなく、1904年に書かれた彼の短篇『予言者の許で』 *Beim Propheten* の中で、同年ミュンヘンのデルレットの家で行われた『宣言』の朗読会の模様がかなり事実 に 忠実に描写されている。ここでは、詩人の名前はただダニエルとなっており、妹の名前もマリア・ヨゼファ Maria Josepha に変えられている。朗読はスイスから来たゲルマニストによって行なわれる。マン自身をモデルとしている小説家にとっては『宣言』は「説教であり、比喻であり、テーゼであり、掟であり、幻想であり、予言であり、日令めいた呼びかけであり、それらが詩篇と黙示録との混り合った文体で、軍事的戦術的表現と哲学的表現とを伴って交互に無限に続くのであった。」<sup>28)</sup>この短篇の終り近くで、小説家は「このダニエルには天才のすべての前提条件が揃っている。即ち、孤独、自由、

精神的情熱、壮大なものの見方、自分自身に対する信頼、それどころか、犯罪と狂気に近いものまである。足りないものは何か。ひょっとしたら人間的なものではなからうか。少しの感情、憧憬、愛ではないだろうか<sup>30)</sup>」と問いかける。そして彼は「しかし、これは全く即座の仮説だ<sup>31)</sup>」とつけ加える。

このように、『予言者の許で』では、勿論『ファウスト博士』におけるように、前ファンズムの唯美主義は問題になっていないが、マンは、ダニエル＝デルレットの天才を認めながらも、彼の中に人間的なものが足りないことを批判している。短篇の最後で小説家は「さあ、狼のように夕食を食べよう」といいマンは「彼は生活に対してあるかかわりを持っていた<sup>32)</sup>」という。このマンの批評は当たっているように思われる。そして、ここにマンとデルレットの生き方の相違がはっきり出ているように思われる。つまりマンの中には芸術家性と市民性の二つの相対立する性格が一つの緊張的統一をなしているのに対して、デルレットには宗教性と結びついた芸術家性はあるが、市民性は殆んど欠けているといってよい。それは先にも引用した「私はブルジョアもボヘミアンもどちらも嫌いだが、どちらか一方を選べというのならボヘミアンを選ぶ」というデルレットの言葉が、端的にこのことを示している。マンは『予言者の許で』の中で、デルレットの芸術家としての才能には天才に近いものを認めるが、彼に市民性とそれのもつ健全な現実感覚がない点を批判するのである。

マンは更に、1924年に発表された長篇小説『魔の山』*Zauberberg*の中で人文主義者ゼテムブリーニに対立するイエズス会員レオ・ナフタLeo Naphtaの中に再びデルレットの歪像を描いたといわれているが、ここでは既に変形が余りに大きいので、ナフタの中にデルレットを探することは当を得ないと思われる。

トーマス・マンは『宣言』を通してのみデルレットを知っていた。しかしそれだけではデルレットの文学の世界を知るには十分でない。そこで、われわれは1932年に発表された彼の『フランケン・コーラン』において詩人デルレットが如何に生長し、彼の詩の世界が『宣言』に比べて、どれほど広く、多様になったかを見なければならない。

## IV

『フランケンのコーラン』は一つの序詩 **Proömion** と九つの章からなる507頁の大詩集である。章の初めに表題はなく、ただ大きな花文字で（章の初めがそれと分る）示されているだけである。D・ヨーストによれば、第1章は「神への呼びかけと祈り」、第2章は「アルゴ船乗組員の出発」、第3章は「春の祭り」、第4章は「酒の歌」、第5章は「愛の歌」、第6章は「幻滅」、第7章は「科学の批判」、第8章は「歴史の批判」、第9章は「新しき出発」である。

序詩の冒頭で、デルレットは次のように歌っている。

Als geistliches Gefäß voll mannigfaltigen Wohlgeruchs  
von Moschus, Ambra und deutscher Fichte  
wurde in Weltgesangs-Rhythmen abgefaßt dieser Koran,  
zusammengestellt aus wundersamer Zeiten Berichten,  
aus Tagvisionen, und Nachtgesichten,  
Sterndeuter-Orakeln und Göttergeschichten,  
Prophetensprüchen und beitonenden Liedern,  
daß er euch Geist und Gemüt zu Gott erhebe,  
dem Allgewaltigen, der barmherzig ist.<sup>32)</sup>

終りの句が示しているように、デルレットにとっては、彼の詩作そのものが、いわば神に到る道であり、楽園に到る道である。そして楽園こそ彼の詩的であると同時に宗教的なコートピアである。そうであるなら、『フランケンのコーラン』はユートピア文学のジャンルに入れることができるかもしれない。そしてまた、それは『宣言』の中心にあった教団のイデーを更に宇宙的な規模にまで拡大したものといってよい。しかも、それは同時に今までの詩のすべての形式を、叙事詩も、抒情詩も、牧歌も、ディチュランボスも、すべて試みようとするのである。

さて、序詩の中心をなすのはデルレットが愛した永遠の都ローマの讃歌である。D・ヨーストによれば、この詩はその音楽性とそのイメージのバロック的な積み重ねによって、極めて印象的である。

O aromales Rom der sieben Himmelshügel,  
 am Wohlgeruche aller Wonnen reich,  
 auftauchend aus dem Azur  
 mit zieren Türmen und bekränzten Zinnen,  
 Du Braut des großen Königs,  
 behütet vom Schatten der Kherube,  
 Du Ursprungsland der heiligen Quellen,  
 aller himmlischen Länder Krone und Lichtjuwel,  
 Du Becher, der von jeder Wollust schäumt,  
 Du Stadt der Wonne und Scham,  
 hochgelobt im Wandel Deiner Tage,  
 Du Lieb der Allerheiligsten Dreifaltigkeit,...  
 wenn ich abtrünnig je von Dir mich kehrte und Dein vergäße,  
 die Hand verfaule mir an ihrem Stumpfe,  
 das Herz berste mir,  
 verströme den roten Rauschtrank der Liebe,  
 das Licht verfahle, es verstumme der goldenen Lieder  
 Mund.<sup>33)</sup>

第1章では詩の形でデルレットの信仰告白がなされる。デルレットにとって神は何よりもまず天と地との創造者である。神は一切を無から創造したから自らは被造物ではなく、それ自身による存在 *esse per se* である。そしてそこから神の存在の確実さと動かし難いことが出て来る。神は、また、全知全能であり、何も欠けたことのない完全な存在である。神は一切の質料と結びつかない純粋な存在である。しかし、彼の詩の中で、神が次のように語る時、それは汎神論的な神にかなり近づいているように思われる。

Ich bin aller Welten innerste Werdekraft.

...

Ich bin in Allem, was Leben ist,  
 und nichts, was Ich durchdringe, ist öde und leer.  
 Ich durchatme den Himmel, die Erde, die Sonne,  
 den Wind, die Wüste, das Meer.<sup>34)</sup>

デルレットはまたある箇所では神に対して「世界は汝の身体であり、空間は汝の隠すベールである<sup>35)</sup>」と述べている。しかし、世界が神の身体であるとしても、それはギリシヤ人のように、世界そのものを神と見做しているのではないであろう。いずれにしても、デルレットの神観はスコラ的ではなく、エックハ



ルトのようなドイツ神秘主義に近いのではないかと思われる。何故なら、彼の神観は、ドイツ神秘主義のように、キリスト教の伝統の中での汎神論的傾向を示しているからである。この点で、彼のドイツ・ロマン主義との親近性も明らかであろう。

「アルゴ船員の出発」と名づけられた第2章は次のような詩で始る。

Nah düstert mir die arge Welt,  
zum Paradies ists steil hinan!  
Verloren ging die Himmelsbahn,  
der Erde Werk ist mißgetan,  
die ganze Welt ist so verkehrt,  
daß jeder Tag sich selbst entehrt!<sup>36)</sup>

この詩で分るように、この世界における楽園を失った人間存在の悲惨が、第2章では歌われる。デルレットは「われわれの日々は地上における夢中歩行<sup>37)</sup> Nachtwandeln である」という。

In Drangsal wurden wir empfangen und in Sünden gezeugt  
im widrigen Aspekt der Notgestirne.  
Von allen Traufen Glücks nicht Einen Tropfen!  
Aus Ton und Tränen sind wir geknetet,  
Gemisch von Dunst und Feuer, Kot und Strahl.  
Erdmoder nährte uns,  
seitdem uns die Wehmutter in ihre Arme nahm.  
Ein Flammenzucken, ein Schattenbeben,  
nur eines Seufzers Länge währt das Leben.<sup>38)</sup>

この人間存在の悲惨をまぬがれるために、人は失われた楽園を探し求めねばならない。こうして、楽園を求めてアルゴ船は船出する。

Laßt uns aufbrechen und eine neue Himmelserde suchen,  
andere Götterbilder, grünere Bäume, weichere  
Lüfte, das wohlgepriesene priesterliche Tempelland.<sup>39)</sup>

アルゴ船はヘルクレスの柱を越えて出て行く。夜になると、月は海の上に銀色の織機を置き、ナイアードは水面に姿を現わす。一転して嵐の場面が描かれ

波濤を越えてネプチューンが馬を走らせて行くというようなクラシチスムスの画を思わせる情景が描き出される。碇りを降ろして上陸したある島で、全ての病気をとり去る若返りの泉を見出したり、食べると甘美な永遠の眠りに陥る木を見出したり、この章には叙事詩的神話的な要素が極めて濃厚である。後にも触れるように、デルレットはこの章ではギリシヤ神話とホメロスの叙事詩の世界を再現しようとしていると思われる。

さて、アルゴ船の乗組員は「Avalun の森」(Artus 王伝説に出て来る死せる英雄の住む所)や「消えた希望の前山」*das Vorgebirge der ausgelöschten Hoffnung* あるいはレヴィアータンの島等を次々に訪れるが、そのいずれも導ね求める楽園でないことが明らかとなる。

Die aber das Paradies suchten, fanden den Eingang nicht.  
Es war, als hätte ihn der Wächter des Paradieses  
mit dem Schutte eines gefallenen Sterns bedeckt.<sup>40)</sup>

と詩人は歌う。

第3章の冒頭では航海に疲れて故郷に帰って来た喜びが歌われる。

Wenn schöner auch in andern Zonen  
die warme Himmelssonne scheint,  
doch besser ists, daheim zu wohnen  
in dem gewohnten Kreis vereint.<sup>41)</sup>

すぐ続いて、

Siehe, der Winter ist zergangen,  
die sanften Föhne sind erwacht,  
entblättern winterliche Äste  
und kleiden die Akazien grün.  
Der Feigenbaum setzt Knospen an.<sup>42)</sup>

と春の来た歓びが歌われる。

ここでは、春に表われた自然そのものと、それがもたらすディオニュソス的

な陶醉にひたっている詩人の魂が歌われている。

Des Frühlings Odem, Blut und Blütenseele,  
die ganze dunkle Magiegewalt der sproßenden Erde wird lebendig  
in den ersten schüchternen Blicken der Veilchen aus dem Lorbeer-  
[dunkel,  
im Knistern der knospenden Zweige,  
im leisen Lispeln des jungen Grüns,  
im unhörbaren Nagezahn der Flechte,  
in den von Bienen summenden Honigzelten,  
im Flühlingsrausch der saftgeschwellten Birke,  
in den harzigen Knospen der Fichte,  
in jeder Ecker, die halbgeöffnet ihren Keim entläßt.<sup>43)</sup>

自然はデルレットにとっては神の言葉を書いた聖なる書物である。そして自然の背後に、彼は創造者としての神を予感する。彼は後に『フランケンのコーラン』の第二部をなすはずであった『聖者』*der Heilige* の中で、次のようにいっている。「深く見る精神の目で、自然の王国は調和と類比の無限の多様であると同時に、対立における統一であると考えてる者にのみ、世界の出来事の多くが天国の比喻として語りかける。彼にとっては自然なものほど素晴らしい深さを持つものは何もないように思われる。彼にとっては自分と宇宙の現象との間の一切の関係は不滅の精神的歆びをもつ。あらゆる自然の姿は彼に意味深く運命を思い出させる。彼にとっては男女の身体、動物、樹木、池、雲、噴水は不滅なるものの写しとなり、彼自身の世界詩 *Weltgedicht* の重要な形姿となるのだ。<sup>44)</sup>」デルレットにとっては、詩人とはまさにこのように深く見る精神の目で自然を無限の多様として、そして同時に対立における統一として見ることできる人間である。デルレットはまたある箇所で「自然という本はすべての人間に開かれているが、それは詩人にとっては、二重のアルファベットで書かれている。彼が秘密に満ちた言葉のもっているはっきりした意味を悟るのは、自然の暗号文字からであり、例えば、手の筋、稲妻の光の屈曲、蜘蛛の巣のもつれた糸、五つに先の分れた葉の葉脈、木の木目、雲の様、鳥の飛行の型、金属板に滴り落ちる石灰のしずくの模様、そういったものからなのである。<sup>45)</sup>」

第4章「酒の歌」では、美的なものは、やはりディオニュソスの、或いはミステックな陶醉の中に求められている。実際、ここではデルレットはディオニュソスの頌歌であるディチュランボスを模倣しようとしている。最初に古代的なバッカナールが歌われる。

Die Schellen gellden, die stachelnden Töne der phrygischen Pfeife  
mischten sich in die Musik von knatternden Kastagnetten,  
rasselnden Trommeln und dröhnenden Hörnern.

...

übermütig und fessellos wie junge Kentauren,  
erhoben sich Alle und fingen zu tanzen, zu singen und zu springen  
[an.<sup>46)</sup>

時に、酒の歌はシェップエル風の学生歌に似たものとなる。

Ein Feuer brennt in mir, und mein Begehrt  
ruft stets in einem Vollgenügen: "Mehr."  
Im Trinken kenn ich keinen Unterlaß  
und fürchte nicht das Heidelberger Faß.  
Wenn ich ein Gott in Seiner Allmacht wär,  
ich tränke selbst das ganze Weinmeer leer.<sup>47)</sup>

■第5章の「愛の歌」も先の2章と同じく感覚的なディオニュソス的な歓びに始まり、それがミステックな結合への出発点となっている。そして感性的な愛から宗教的な愛に到る愛の様々の姿が歌われる。この章にはまたアフオリズム風の詩がかなり多い。

Die Liebe scheidet und bindet Alles  
befriedet, bestürmt und entzündet Alles.  
Sie erträgt Alles,  
sie hält die Wange hin, wenn sie geschlagen wird,  
sie erduldet Alles in Frieden.  
Die Liebe ist langmütig,  
kann keinen Augenblick sich untreu werden.  
Könnte sie aussetzen,  
so wäre sie nicht die Liebe.<sup>48)</sup>

「愛は盲目である」とよくいわれるが、デルレットはこれを否定して、「見

る」ということの中に愛の本質があるという。この場合、「見る」というのは、単に対象を感覚的に「見る」のではなくて、イデーにおいて「見る」ことである。そこでデルレットは、

Lieben heißt: in der Idee sich sehen und erkennen,  
daß die menschliche Gestalt  
von ihren materiellen Eigenschaften ganz verschieden ist.  
O die Magie der Liebe! <sup>49)</sup>

と歌う。

更に、彼によれば、愛の情熱の火は有限者である人間につきまとっている卑俗な現実を焼き尽くして、二人をイデーにまで高める。このように、人間をイデーにおいて見、そのことによって人間の魂をイデーにまで高める愛とは、まさにプラトンのいう愛である。

第6章「幻滅」では、一転して今までの「アルゴ船団の歌」、「春の歌」、「酒の歌」、「愛の歌」において歌われて来た世界が結局は仮象であったことを知った詩人の魂の嘆きが歌われる。詩人は「私の希望の穂は刈り取られてしまった。そして私は何に頼ったらよいのか、もうわからない。」と歌う。<sup>49a)</sup>

「堕ちた魂の嘆きの歌」Der Klagegesang der gefallenen Seele と題する詩の中で、デルレットは「魂は地上の楽園を見出したと思っていたが、実は不具にされ、萎縮した、罪深い世界を発見したのだ」という。<sup>49b)</sup>そして再びこの世界（俗世）における人間存在の悲惨が露わになる。デルレットによれば、人間存在の悲惨は何よりも、人間が迷妄に捉われていることにある。それが人間の生成の原因である。

この被造物の中にある自由に抗う原理を、デルレットはアパター *Apate* と呼ぶ。（これは仏教でいえば無明だといってよいであろう。）アパターとはギリシャ語で「欺瞞」、「瞞着」、「誘惑」、「迷妄」を意味する言葉である。人間はこのアパターに惑わされて、実現できぬものを追い求める。それは現実的なものの様相を歪め、われわれの真理への意志を弱める。それはまた、人間が人生の課題と真の使命を意識するのを妨げる。更にデルレットはこのアパターをキリスト教的に解釈して、根源悪であると考える。そして彼はこの根源悪

を克服するには、神の恩寵がなければならないという。

デルレットはアパテーに支配された人間存在の空しさを旧約中の「伝道の書」と同じように歌う。実際、「伝道の書」で繰り返される「空の空なるかな」**vanitas vanitatem** という言葉さえ一箇所出ている。「人生とは何か。あらゆる妄想の陰の頂点。**vanitas vanitatem.**」<sup>50)</sup>

第5章では、このように人間存在そのものが問題となったのに対して、第6章「科学の批判」では人間が存在している世界、特に認識の対象としての自然的世界が問題となる。人間の中に欺瞞的な原理が根源悪として存在するのと同様に、同一の欺瞞的な原理が被造物としての自然全体を貫いている。従って、世界はその深みにおいて根拠づけ難く、その表面においては解決できぬから、一つの大きな謎である。人間はこのような世界を完全に認識することはできない。世界には人間の意識を超えたエネルギーや存在がある。人間は結果の継起についてだけ知るのであって、それが結果しなければならなかった法則を知らないし、生成の原動力 **die Triebkräfte des Werdens** も知らない。現象としての世界の背後にあるのは物自体 **Ding an sich** といってもよい盲目的な諸力の混沌たる世界である。それは感覚ではとらえられず、理解されない。このデルレットの哲学的世界観は、ショーペンハウエルのそれに著しく似ている。

また、デルレットは人間の認識について次のようにいう。「一切は遠近法的評価である。」<sup>51)</sup> この言葉や思想が、ニーチェから来ていることは明白である。それは、人間の認識がその主観のとり立場によって制約されていることを意味している。従って、究極的な原因の認識は人間の能力を超えている。デルレットはまた分析に基く近代自然科学を批判して、「愛を持たない認識は世界を殺し、世界から神性を奪う」<sup>52)</sup> という。自然科学がどこにも靈魂を見出すことができないのは、全体の中にのみ成り立つものを分析するからであり、身体が細胞・神経・膜・腱・筋肉・骨以外に生きた統一をもったものであることを知らないで、屠殺者のように生きたものを乱暴にばらばらにしてしまうからである、と彼はいう。デルレットはまた「愛の目差しを持たぬ自然科学の知識は、生命そのものが一つの奇蹟であって、不変の自然法則の結果ではないということ

とを知らないのだ<sup>53)</sup>」ともいう。自然科学は諸現象の偶然的な被制約性だけしか見ず、「世界の運命と魂の歴史という超越的な生きた真理の中に入り込むことはできない<sup>54)</sup>」のである。

そのような真理、或いは永遠なる存在の領域に入り込めるのは、デルレットによれば、経験やそれに基く科学ではなくて、一種の直観であり、「一切の普遍的なものから分たれた特殊な忘我的意識である。」<sup>55)</sup>さて、デルレットは、直観する主観と直観される客観とが一つになっているような忘我的意識を持った者を動的哲学者 **ein dynamischer Philosoph** と呼ぶ。このような哲学者にとっては、一切は不思議であり、奇蹟的である。デルレットによれば、奇蹟的なもの、不思議なものとは、法則的な、外的な出来事が個人的な体験と神秘的な仕方で出会うところではどこでも起るのである。しかし、この偶然といってよい神秘的な出会いを説明することは科学にはできないのである。

自然科学は自然を因果の法則から説明しようとする。しかし、自然はもと因果的必然性ではなくて、自由をもっていたのではないかとデルレットは推測する。聖書の中の墮罪の伝説は、顛倒し、自己自身に矛盾する意志の結果として、自由な自然法則が転覆したことを意味しているのではないかとデルレットは考える。そして楽園は——それを探し求める魂の遍歴が、この『フランケンのコーラン』のテーマであるが、——正に墮罪以前に存在した、善と正義のアイデアと直接に関係している自由な世界、真に調和のある世界 **der wahre Kosmos** のあったことを示している。このように、デルレットにとっては、**Kosmos** というギリシヤ的な自然的世界と楽園 **Paradies** というユダヤ・キリスト教的な宗教的世界とは一致するのである。彼にとっては、従って、楽園の探求は単に人間の魂の救済の問題であるのみならず、顛倒せる自然をも救済し、元の **Kosmos** を回復する問題なのである。

さて、自然科学とそれによって捉えられる自然の世界が、実は真の自然の世界ではないことを明らかにした後で、デルレットは第8章で、人間の行為とそれによって生ずる歴史的世界を問題にする。

デルレットは、曾て歴史を生み出した歴史的行為や歴史的思惟はなくなり、現代においてはもはや歴史的出来事は可能ではないと考える。あるのは偶然な

出来事であり、全く元素的なばらばらの行為であって、そこでは歴史的感覚も失われてしまう。「道徳的自由を否定し、僅かに盲目的な進化という形で動いている非人格化された自然を信ずることによって、現代人は世界史の過程を無意味なものにしてしまった<sup>56)</sup>」と彼はいう。更に「現代人はもはや大きな創造をすることはできなくなっている。何故なら、物質的なものが優勢を占め、思想はもはや高さ<sup>57)</sup>と深さを持たず、一切は重力に屈し、手段が目的を支配することによって、將軍の天才というようなものももはや通用しなくなっているからである。」

デルレットはまた現代人の利己主義を批判して、「誰もが自分の感覚を満足させるもののみをほめる。自分の為<sup>58)</sup>にのみ利用しようとする者が賢明だと思われる。人は敬虔さ *Frömmigkeit* を失っている」という。無限の全体に身を捧げ、個々のものがそこから出て来た根底のために生きようとする敬虔な習慣は失われる。古代においては、日常の諸現象の中にさえ聖にして神的なもの *ein Numinoses und Göttliches* が働いていたのに、そのような信仰を失った現代人にとっては一切は恐るべきカオス的<sup>59)</sup>空無 *eine fürchterliche, chaotische Leere* の前で演じられる。

宗教はもはや永遠なるものに単に想像上で関係する芸術好きの空想家のひまつぶしである。宗教的確信や教義や信仰箇条の中にある信仰の力は教会からも消えてしまった。そして、このように永遠なるものに対する信仰が失われたために近代の芸術も絶えず変る。それは常に何か新しいものを生み出すのに懸命である。

このような内面的不幸から逃げ出すために、人間は外的世界の征服に身を投ずる。その結果はどうかといえば、生命力の源の渇渴であり、機械による人類の大規模な奴隷化であり、前代未聞の技術的完全さの増進であり、美的感覚の貧困化である。

第8章の最後の詩でデルレットは次のように歌っている。

Das also wäre die Welt,  
eine Wirklichkeit, die von der Dichte eines Traumes ist!  
Herr des Paradieses, hebe mich aus der Nacht dieses Todes!<sup>59)</sup>



最後の第9章「新しき門出」において、詩人の魂は再び楽園の探求に出発する。この章の初めでは、詩人の魂は憂愁に包まれ、死の恐怖が彼を襲う。詩人の魂は死に向っている。

ich will nicht scheiden, eh sich mein Höchstes  
die süße Freude aus den tiefsten Wurzeln des Lebens trank.  
Ich habe nicht Zeit zu sterben.  
Doch komme wieder, wenn mir dein Anblick frommt  
und reiche mir den kühlen Heiltrank,  
der das Fieber des Lebens stillt,  
den süßen Mohnsaft, der in die Schale des Vergessens träufelt.<sup>60)</sup>

すると死の影は消え去り、代わりに天使が現われたかのように思われる。そして夜に生れた憂愁に満ちた考えは消えてしまう。詩人はその心象風景の中で、死を捕えようと網を編んでいる漁師に出会う。これは死を征服しようとするキリストを象徴している。

詩人の常に求めて止まない魂にとっては、この世は余りにも小さく思われる。世界だけでなく、魂を包んでいる身体も余りに狭く感じられ、それは天の広さに憧れる。詩人の魂は楽園を見出すまで安らぐことができず、永遠の都への巡礼に出かける決心をする。勿論、ここでは永遠の都は霊的な意味におけるものと、現にあるローマとが二重写しになっている。神に仕えるために、この世から解放されることによって、人間は初めて、虚偽へと誘惑しようとしたアパターの力を克服することができる。

この巡礼の旅の伴侶となるのは自分自身の影だけである。（ここでは特にニーチェのツァトゥストラの影響が明らかに見らる。）その途中山道で出会った山の老人に、詩人は彼が探し求めている国はどこにあるのかと尋ねる。すると老人は「おまえのエデンの園はお前の中に栄えており、お前の胸の中で、すべての罪は贖われているのを知らないのか。ここで浄福を奪われているものは、彼岸を信じて<sup>61)</sup>も無駄なのだ」と答える。この老人の言葉に従って山中に止まった詩人は、ニーチェのツァトゥストラと同様、人間と動物と谷の住人の遙か上に住み、風の音の中に神の声を聞くのである。詩人の魂は今や森の神パンに

変身し、彼の食卓には松の実、甘根、蜜が並べられる。森全体が彼の宿である。この心象風景は詩人の魂の孤独を表わしていると思われる。

O du von Glück zitternder Garten der Einsamkeit!  
Lange habe ich dich nur durch das goldene Gitter gesehen,  
das nur die schuldlos reinen Hände öffnen.  
Heute häuft sich ein heilender Trost in meinem Herzen,  
das von den bitteren Früchten  
am Baum der Erkenntnis gekostet hat,  
umringt und durchrinnt mich ein Zauber von dem frischen Grün,  
von dem krystallinen Lachen der Quellen,  
von den zarten Knospen an den Fingerspitzen der Zweige.  
O nie genießen, nie im Brand der Sinne sich verzehren  
und nur an deinem reinen Blütenglanz sich freuen,  
o meine süße, gottversunkene Einsamkeit!<sup>62)</sup>

このように『フランケンのコーラン』において、デルレットは楽園を見出そうと努力する一つの宗教的な魂の遍歴を描こうとした。それは先ず、楽園を自己の外に求め、神話叙詩的世界をさまよった後、春に象徴される自然の美の中に、酒と愛との感性的な陶醉の中に楽園を求めて、ついに見出すことができない。そして、この魂は、この世界を、即ち自然と歴史の世界を全体として批判し、否定する。最後の章で再び楽園の探求に出かけた詩人の魂は、途中で自分自身とのみある孤独の中に一つの幸福を見出したかのように思われる。しかし、恐らくこの孤独は楽園探求の条件であっても、楽園そのものではないであろう。彼の楽園探求の詩的・宗教的努力は更に、『フランケンのコーラン』の第2部、第3部をなす『教団の書』 *Das Buch vom Orden*, 『戦いのラッパ』 *Die Posaune des Kriegs*, 『楽園』 *Das Paradies*, 『歴史の書』 *Das Buch der Geschichte*, 『タナトスの死』 *Der Tod des Thanatos*, 『聖者』 *Der Heilige* 等の作品となって展開された。これらの未刊の作品がわれわれの目に触れるまでは、われわれはまだ彼の詩的宗教的世界について最後の言葉をいうことはできないのである。

この小論を終るにあたって、現在殆んど入手不可能なデルレットの『宣言』『フランケンのコーラン』といくつかの貴重な草稿のコピーを筆者に貸して下さった、ダルムシュタット在住のクリスチーネ・デルレット夫人の御好意に心から感謝の意を表したいと思う。

### 参 考 文 献

デルレットの既刊、未刊の著作一覧については、Jost, D., Ludwig Derleth. *Gestalt und Leistung*, Stuttgart, 1965. S. 170を参照されたい。なお1970年には、デルレットの生誕百年を記念して、詩人の全集が刊行される予定である。以下に掲げるのは、本稿を書くのに筆者が参考にしたもののみである。

Derleth, L., *Proklamationen*. München, 1919.

Derleth, L., *Der Fränkische Koran. Des Werkes erster Teil*. Kassel, 1933.

Derleth, L., *Auswahl aus dem Werk*. Nürnberg, 1964.

Derleth, L., *Advent*. Bellnhausen über Gladenbach, 1968.

Jost, D., Ludwig Derleth. *Gestalt und Leistung*. Stuttgart, 1965.

Balthasar, H. U. v., *Apokalypse der deutschen Seele*. Band III. Salzburg, 1939.

Jaekle, E., *Die Botschaft der Sternstraßen*. Stuttgart, o. J.  
*Christliche Dichter im 20. Jahrhundert, Beiträge zur europäischen Literatur*. Hsg. v. Otto Mann. Bern, 1968.

Mann, Th., *Doktor Faustus*. Frankfurt a. M., 1963.

Mann, Th., *Sämtliche Erzählungen*. Frankfurt a. M., 1963.

### 註

- (1) Mann, Th., *Doktor Faustus*, Frankfurt a. M. 1963 S. 390 関泰祐、関楠生訳「ファウスト博士」岩波書店、1957年、第3巻、60頁。(引用文はこの訳書に拠った。)
- (2) Jost, D., Ludwig Derleth. *Gestalt und Leistung*. Stuttgart, 1965.

- (3) a. a. O. S. 21f.
- (4) a. a. O. S. 28f.
- (5) a. a. O. S. 30.
- (5a) a. a. O. S. 36f.
- (6) a. a. O. S. 37.
- (7) a. a. O. S. 36.
- (8) a. a. O. S. 65.
- (9) George, St., Werke. München u. Düsseldorf, 1958. Bd. I. S. 330
- (9a) a. a. O. S. 331,
- (10) D. Jost, 前掲書 S. 66f.
- (10a) a. a. O. S. 67.
- (11) a. a. O. S. 68.
- (12) a. a. O. S. 144.
- (13) Derleth, L., Proklamationen. München, 1919 S.5
- (14) アサシン派は11世紀末、マホメット教のカリフの後継者を廻って分裂したイスマイリア派の一派。麻薬ハシッシュを用いて信者を陶醉させたために、この名がつけられた。(アサシンとは「ハシッシュ吸飲者」の意味。)北ペルシヤのアラムート山に砦を構え、狂信的な信者を使って十字軍やイスラムの多くの王侯、貴族を暗殺した。
- (15) Derleth, L., Auswahl aus dem Werk. Nürnberg, 1964 S. 218.
- (16) a. a. O. S. 217.
- (17) Derleth, L., Proklamationen. S. 26.
- (17a) a. a. O. S. 5.
- (18) Derleth, L., Proklamationen. S. 9.
- (19) マタイ伝, 16章, 24節参照
- (20) Derleth, a. a. O. 22.
- (21) a. a. O. S. 21.
- (22) a. a. O. S. 34.
- (23) Mann, Th, a. a. O. S. 392. 岩波版, 第3巻, 63頁
- (24) D. Jost, 前掲書 S. 62.
- (25) Derleth, L., Auswahl. S. 13.
- (26) a. a. O.
- (27) D. Jost, a. a. O. S. 53.
- (28) 実際はゲルマニストのルードルフ・ブリューメル Rudolf Brümel が朗読した。ついでにいうと「カンガルーのような顔をした哲学者」といわれているのは、後に性格学で有名となったルードヴィヒ・クラークス Ludwig Klages である。

- (29) Mann, Th., Sämtliche Erzählungen. S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1963. S. 291.
- (30) a. a. O. S. 292.
- (31) s. a. O. S. 292.
- (31a) a. a. O. S. 293.
- (32) Derleth, L., Der Fränkische Koran. Des Werkes erster Teil. Bärenreiter, Kassel 1932. S. I.
- (33) a. a. O. S. III f.
- (34) a. a. O. S. 28.
- (35) a. a. O. S. 34.
- (36) a. a. O. S. 59.
- (37) a. a. O. S. 60.
- (38) a. a. O. S. 60.
- (39) a. a. O. S. 68.
- (40) a. a. O. S. 81.
- (41) a. a. O. S. 85.
- (42) a. a. O. S. 85.
- (43) a. a. O. S. 87.
- (44) Der Heilige. I. S. 38. (aus Manuskript)
- (45) a. a. O. I. S. 40. (aus Manuskript)
- (46) Der Fränkische Koran. S.121.
- (47) a. a. O. S. 143.
- (48) a. a. O. S. 218f.
- (49) a. a. O. S. 222.
- (49a) a. a. O. S. 243.
- (49b) a. a. O. S. 251.
- (50) a. a. O. S. 322.
- (51) a. a. O. S. 350.
- (52) a. a. O. S. 355.
- (53) a. a. O. S. 360.
- (54) a. a. O. S. 364.
- (55) a. a. O. S. 374.
- (56) a. a. O. S. 412.
- (57) a. a. O. S. 415.
- (58) a. a. O.
- (59) a. a. O. S. 466.
- (60) a. a. O. S. 468.
- (61) a. a. O. S. 494.
- (62) a. a. O. S. 502.

## **„Die Proklamationen“ und „Der Fränkische Koran“**

**V O N**

**Ludwig Derleth**

### Résumé

Das Grundthema der „Proklamationen“, die der Dichter Ludwig Derleth 1904 veröffentlichte, ist die „Imitatio Christi“. Für ihn handelt es sich im Christentum nicht um die Dogmatik, sondern um die Nachfolge Christi, die „den freiwilligen Gehorsam der ganzen Person gegen Christus“ und zum Kommen des Gottesreichs den Krieg gegen die Welt fordert. Weil dieses Werk einen militaristischen Fanatismus zu entfachen schien, karikierte Thomas Mann, welcher bei der Lesung anwesend war, später in seinem Roman „Doktor Faustus“ Derleth als den Dichter Daniel Zur Höhe, der darin „den juxhaften und unverantwortlichen Ästhetizismus“ vertritt. Wenn aber das Grundthema dieses Werkes, wie oben gesagt, eigentlich ein religiöses ist, so kann niemand den Dichter Derleth selbst als einen präfaschistischen Künstler brandmarken.

„Der Fränkische Koran“, der 1932 erschien, hat die Suche einer dichterischen und religiösen Seele nach dem Paradies zum Thema. Wie seine „Proömion“ ganz deutlich zeigt, ist für Derleth die Dichtung nichts anderes als Dokument einer Seele, die sich zu Gott und zum Paradies zu erheben strebt. Im ersten Kapitel lobt und bekennt er in Versen Gott. In den darauf folgenden Kapiteln sucht die ästhetische und religiöse Seele des Dichters vergeblich das Paradies zunächst in der homerischen epischen Mythenwelt, dann in der schönen Natur, die sich im

Frühling offenbart, ferner im dithyrambischen Rausch von Wein und Liebe. Darauf kritisiert diese dichterische Seele sowohl die natürliche als auch die menschlich-geschichtliche Welt. Im letzten Kapitel geht sie wieder von neuem auf die Suche nach dem Paradies und findet unterwegs in ihrer Einsamkeit allein mit sich selbst eine Ruhe und Glückseligkeit. Diese Einsamkeit wäre wohl eine Voraussetzung dafür, daß sie nun in sich selbst das gesuchte Paradies finden kann, aber sicher nicht das gesuchte Paradies selbst. In seinen späteren Werken, die bisher größtenteils unveröffentlicht bleiben, setzte der Dichter seine sowohl dichterische wie religiöse Suche nach dem Paradies fort.